

# 熱が出た

逆に36度未満の**低体温**にも注意!



小児救急電話相談  
「#8000」を活用  
しましょう(P1参照)

受診前には必ず確認の電話を病院へ!  
解熱剤の座薬や頓服をいつも家にストックしてね!  
これは痛み止めとしても使えます。  
大人に使う薬は子どもには代用**禁**とします!

「顔色不良」なうえ  
(顔面蒼白やチアノーゼ)  
「呼吸が弱い」  
「意識が無い」  
「言動がおかしく  
視線も合わない」  
「5分以上のけいれん」  
などの時は  
**救急車を!**

1回目の体温測定後、適切な室温や衣服で  
安静にさせ、30分後にもう一度測る

熱が下がった

★子どもの急な発熱で受診をした方が良かったら悩まないでね!  
小児救急電話相談「#8000」を利用しよう。(詳しくはP1を参照)

**発熱は体の負担となりますが、防御反応のひとつです**  
人間はウイルスや細菌などの病原体に感染すると熱を出して、体内に入り込んだ病原体の活動を抑えようとして  
ます。平熱よりも1度以上高く、環境を整え、時間を置いても下がらないなら発熱といえます。他にもいつも  
と違う様子が無いか確認しましょう。(普段からの体温をはかり平熱を知っておくことも必要です)  
赤ちゃんは体温調節機能が未熟なため、室温や衣類の着せ方によって体温が上がることもあります。

発熱で一番怖い病気の代表が『髄膜炎(すいまくえん)』です

発熱+嘔吐+頭痛(赤ちゃんなら不機嫌・不活発)と3つ症状が揃えば『髄膜炎』の可能性が  
髄膜炎の場合、頭や首などが痛くて首を前に曲げにくくなります。ですから、もしお子さんが、お気に入りの  
おもちゃを下に置いて、あごが胸に付くくらい目線を落として、機嫌よく遊べていれば、髄膜炎の可能性は低い  
と思います。ただし乳幼児期にはそういう症状が出にくい場合もありますので、3つの症状がある場合は早期  
相談・早期受診が必要です。

★逆に**36度未満の低体温**  
の時も要注意・要相談!

37.5度以上  
38度未満のとき

発熱以外はいつもと変わらない  
機嫌・活気・哺乳力も普通で  
顔色も良く、周りに興味を示す

診療時間外でも電話相談して  
受診場所や時間を決めておく  
(左記の月例別対応や他症状の  
チャートも参考!)



尿路感染症・脱水の診断に役立つ尿検査  
オムツをしている子の尿採取方法  
受診前に自宅でセットしておく  
受診時の尿検査がスムーズです。

発熱以外はいつもと  
変わらない  
機嫌・活気・哺乳も  
普通で顔色も良く  
周りに興味を示す

重症感が無くても時間外でも  
(必ず電話相談して)小児科を  
受診すること  
発熱以外にも症状の悪化があれ  
ば速やかに小児科を受診する  
1か月未満の赤ちゃんは入院に  
なることが多い

38度以上のとき  
赤ちゃんが生後早期  
(0~3か月)  
(通常3か月未満のこと)

赤ちゃんが4か月以上

発熱以外はいつもと  
変わらない  
機嫌・活気・哺乳も  
普通で顔色も良く  
周りに興味を示す

診療時間内にかかりつけ医院へ

診療時間外でも電話相談して  
受診場所や時間を決めておく  
(発熱対応や他症状のチャート  
も参考!)

医師に伝えること

- ・熱は何度あるか
- ・熱はいつごろからか
- ・熱以外の症状について
- ・食事や水分は取れているか
- ・おしっこが出ているか

尿検査の重要性  
尿の(回数や量・色の濃淡などの外観も含め)検査は、患児の情報を沢山知  
ることができ宝宝的山です。点滴が必要なくらいの脱水かどうかの判定や、  
尿路感染症・腎炎などの診断のために非常に重要な情報を与えてくれます。  
通常の尿検査は痛くないため、子どもさんへのストレスが少なく、その上  
情報量の多いお得な検査なのです。

全てのチャートはあくまでも目安です。症状は人によって異なるため様子をよく観察し、心配な時は受診すべきかどうかを電話で相談しましょう。